

古くて新しい住まい方

「ナガヤタワーからの提案」

鹿児島中央駅から、歩いて5分の場所にある「ナガヤタワー」。

スペースの都合上棟割りにはできなかったけれど、縦に重ねた長屋をイメージした5階建ての建物は、2013年4月にオープンしたばかりの賃貸住宅である。

ワンルームから2LDKまで4つのタイプに分かれた38戸の住まいには、今は9歳の少年から90代の高齢者まで、さまざまな人が暮らす。

パンフレットには「江戸時代の長屋のように、住民のみんなが知り合いで、できる事はじぶんでしながらも、互いにさりげなく手を貸し合って暮らしていくことを目指します」とある。

ナガヤタワーは、さりげない気遣いと心配りの中で、毎日を丁寧に暮らすことを目指す、新しい形の共同住宅である。

-

日本の独り暮らし高齢者の割合は現在25%程度で、50%を超える欧米に比べるとまだ少ないが、3世代同居は15%と25年前の3分の1にまで減少している。少子高齢化の現実、家族構成とその暮らし方に、かつてないほどの大きな変化をもたらすことになる。

多世代家族による日々の暮らしの中に、当然のように組み込まれていた「老い」はいつのまにかその居場所を失い、数字の上では、21世紀の高齢者の大半は「老いの暮らし」を一人でおくり、旅立ちも一人で迎えることになるのだろうか。

今までの日本では、そのような暮らし方は誰も経験したことがないため、介護や医療、住宅など様々な分野で、官民それぞれに対応の検討が始まっている。

特に男性より寿命が長い女性は、一人で暮らす期間が長くなるため、経済的な問題や健康状態、あるいは頻発する自然災害への不安などで、心細くなるのも当然のことと言えよう。



■ナガヤタワーのパンフレット

元気なうちの早めの住み替えが提唱され、介護付きの有料老人ホームや国が勧めるサービス付き高齢者住宅への期待も高くなっている。しかし、そこではいくらかの安心を得ることはできるだろうが、生き生きとした暮らしの楽しさやざわめきを感じることは、難しいかもしれない。

高齢になっても、人に頼られたり誰かの役に立ったりすることは十分に可能だし、それが暮らしの張りや生きがいにもなる。

ただ安心を得ることだけを目的として、ある年齢に達したら同じような年齢の人だけが暮らす閉ざされた場所に移り、お世話をされるだけの生活になることでほんとうによいのだろうか。

- ●

アメリカには、リタイアメント・コミュニティと呼ばれる高齢者だけが暮らす地域が多く存在し、その代名詞となっている「サンシティ」と呼ばれる大規模コミュニティがある。アリゾナ州フェニックス郊外にあるこの地域は、「実りある豊かな老後」をうたい文句に、民間の開発業者が1960年代から計画的に開発を進め、80年代には人口が5万人近い巨大な高齢者村になっていった。

ゴルフ場や娯楽施設、図書館や美術館、宗教関係施設、

ショッピングモールなどに加え、医療機関も揃っており、楽しく安心して暮らせる「終の棲家」が強くアピールされた。

日本からも、不動産開発業者や医療関係者などが多く訪問し、フェニックスの輝く太陽のもと、ゴルフやダンス、水泳教室など様々なレクリエーションやボランティア活動に励む、多くの楽しそうなアメリカの高齢者の姿を、彼らのレポートで目にする事ができた。

しかし、19歳以下は一緒に住めないどころか、滞在期間も3か月に限られているという条件に対しては、いささか違和感を感じたし、またこのような暮らしになじめない人もいるのではないかと思われた。

当然のことながら、健康を損ねたり介護が必要になった時にはどのような暮らしになるのか、いくら自立・自助が前提の国とはいえ、ちょっとした手助けなどは、むしろ世代のばらつきがあった方がスムーズにいくのではないかと感じたものである。

今サンシティの暮らしはどうなっているのだろうか。



日本でも血縁による家族を頼りにした高齢者の暮らしが、難しくなっているのは事実ではある。だからといって高齢者だけで集まるのではなく、むしろ「血縁に頼らない共同体」という新たな発想に基づく暮らし方を提唱し、その試みを実践し始めているのが、ナガヤタワーである。

高齢者住宅財団の高橋紘士理事長によれば、このような新しい暮らし方の模索は、全国でも同時多発的に始まっているという。



ナガヤタワーの大きな特徴は、隣接して緩和ケア付きの有床診療所「堂園メディカルハウス」をもつこと。

ナガヤタワーの企画立案者であり、実質的な大家さんは堂園晴彦医師である。



■お話をうかがった堂園春衣事務局長

堂園氏は、もともと産婦人科医を営む家の三代目。生まれた子どもたちが健やかに育つことを目指し、様々な取り組みをしてきたが、1991年からは在宅ホスピスを始めた。

在宅ホスピスを始めた時にこだわったのは、「ホスピス」とは「場所」ではなく「手のぬくもりとおもてなしのシャワー」という「マインド」であるということ。

その後患者の声にこたえて1996年からは有床診療所「メディカルハウス」を開設した。クリニックではなくあえてハウスとしたのは、そこは病室ではなくあくまで家であるという思いから。

病気ではあっても病人になるなという考えから、日常の暮らしを継続させることを追求し、特に緩和ケアの患者にとっては残された日々の充実を目指してきた。

そのような取り組みを通じて、多様な人々がともに暮らし、お互いに支え合うことの重要性に改めて思いをいたし、2007年にマザー・テレサがつくったインドのハンセン病の村「チタ・ガール(平和の村)」を訪ねたという。

メディカルハウスには、ホスピスの患者さん以外の人たちもいたが、心を病む子どもや大人が増えてきていることが気になっていたので、チタ・ガールを訪ねた時には、特に強く心に響くものがあったという。

社会からも家族からも見捨てられたハンセン病の患者が、お互いに支え合い助け合って暮らしているこの村では、自殺も喧嘩もゼロ。

この空気をなんとか建物として実現させたい、という堂園氏の願いが詰まったナガヤタワーである。



■屋上からの眺め。桜島を一望できる



日本では戦後、強い干渉と束縛の象徴であった「イエ」と「ムラ」的なものからの解放が大きな運動になったが、その結果、冷たい無関心が社会を覆うようになった側面もある。

長い時間をかけて、権利や義務、そして責任とともに個人主義が根付いてきた欧米では、個人の自立は当然としたうえで、お互いに支え合うコミュニティの存在も欠かせないものとして、ともに存在している。

またアジアでは、高度成長期前の日本同様、貧しさゆえにお互いが助け合わざるを得ない家族や地域のつながりが、まだ強く残っている。そのため現実には、皆が参加できるコミュニティの良さを生かしたケアやサポートの取り組みを、むしろ大事にしていこうという方向性が伺える。

日本では、急激なしかもいささかいびつな個人主義の浸透により、干渉を嫌う個だけが肥大化した結果、「お互いさま」というちょっとした心配りや手助けなどが、逆に成り立ちにくくなってしまった。また過剰な自立を強えられることから、社会的にも精神的にも孤立しがちになり、その不適合の原因は簡単に個人の資質とされてしまう。

特にその影響をまともに受ける成長期の子どもにとっては、



■1996年に開設された、堂園メディカルハウスの外観

高齢者の存在は必要不可欠であると堂園氏は述べている。人生経験豊かな高齢者は、発達障害の子どもに対しても「まあ、そういうこともあるさ」と、ごく自然にその存在を受け止めることができるから、余裕をもった対応ができる。

18歳になって養護施設を出なければならぬ人も、ここで様々な人と暮らしながら、その生涯を終える可能性をもったナガヤを目指したい、と運営を担う堂園医師の次女春衣さんは思いを語る。



元気な学生は、館内の掃除や高齢者の手助けをすることで家賃が割引になる仕組みがあるという。桜島からの灰が絶え間なく降り注ぐ鹿児島ならではの「灰かき」は、できる人が総出で一緒に行く。下水道が発達していなかった昭和の時代、町内総出で行った「どぶさらい」を思い出す。

身の回りの様々な不便や不都合の解決を、すべて行政の支援やお金で買うサービスに頼るのではなく、お互いさまの気持ちで丁寧に工夫するというマインドをナガヤ暮らしで取り戻すことは、実は古くてとても新しい住まい方の提案である。